2017年5月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第484号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

折り紙文化の普及を担って

今春500号迎えた『月刊おりがみ』

文＝日本折紙協会 編集長・青木伸雄

『おりがみ　創刊号』

『おりがみ　Ｎｏ．５００』
978-4-86540-046-5　本体価格728円

◆折り紙の月刊誌があるの？

本誌の存在を初めて知った方は大抵そうおっしゃいます。折り紙の本の一般的な認識というのは、折り方が図解（「折り図」といいます）されている、という程度のものでしょう。毎月毎月、そんなに載せるものがあるのか？　という素朴かつ素直な疑問で、お気持ちはよく分かります。しかしそのような心配をよそに、この春迎えた500号。足掛け40年余、ひとえに愛好家の皆さんに支えられての節目の記念号となりました。

発行元の日本折紙協会は、1973年10月に設立されました。翌1974年には会報の（季刊）『おりがみ』が刊行されます。これは3号まで、モノクロＢ５判の冊子でしたが、1975年、あらためて仕切り直し、隔月刊としてA4判カラーの『おりがみ』創刊号の発行となります。

1978年には発売元の移行があり、書店販売がなくなり定期購読での会員向け専門誌となりました。日本折紙協会編集発行販売となって月刊となるもののモノクロ冊子、一年後、『おりがみ45号』からは、再びカラー雑誌となり、ほぼ、このままの様式で現在に至ります。

この頃、書店で見かけなくなった『おりがみ』は「廃刊となり、日本折紙協会もなくなったのだ」と思われた方も多かったようで、のちに「世界のおりがみ展」などのイベントで雑誌の存続を知り驚かれ、購読を再開された会員も多いと聞きます。

ながらく直送のみだった本誌は、1990年より地方・小出版流通センターの取り扱いで書店への流通が再開され、現在に至ります。

いまだにメジャーとは言えない本誌ですが、皆さんの知らない間にこのような紆余曲折があったわけです。そこを乗り越えてきた強さ、したたかさ、しなやかさ（まるで和紙の特性のようです）の源は、いったいどこにあるのでしょうか。

◆専門誌の役割

「毎号何を載せているのか」という冒頭の疑問への回答が、折り紙の魅力をひもとくカギとなるでしょう。

現在『プレ創刊誌』と呼ばれ、真の創刊号として一目置かれているフシのある『季刊おりがみ Vol.1』には、「日本折紙協会の船出にあたって」という有識者座談会の記事があります。そこには、折り紙愛好家の会報、機関誌として、いくつかの提案がありました。

（1）作家の育成：

作品の折り方紹介は雑誌の核をなします。伝承作品や著名作家の作品だけでなく、広く一般読者から新作を募り、添削批評を加えながら創作折り紙の作品発表の場とすることにより、作者の著作権を保護するという意味合いもありました。

（2）批評家の育成：

同時に「良い折り紙とは何か」を見る目、審美眼を養い、折り紙というものの正しい評価とその方法を確立しようとしました。「見て楽しむ」のも折り紙の大事な一面です。

（3）講師の育成：

文化の継承には、伝導者が必要です。雑誌という媒体は折り方を図解しますが、記号による二次元的表現には限界があり、形の再現には実際に手本を折って見せ、それを習う「折り紙教室」が優位な部分もあります。日本折紙協会認定の折紙講師資格制度のため

の「折り紙４か国語テキスト」（1980年）の発行に繋がります。講師自身の教え方の技量や教室の魅力も、折り紙の一面と言えます。また、「折り紙教室」という単位は、後年、「支部」へと発展したところも多く、協会の活動の大きな支えとなっています。

（４）折り図記号の統一：

作家によってまちまちだった「折り図」の記号を、統一すること。特定の作家でなく、広く一般の愛好家の団体だからこそ、冷静に比較検討、取捨選択しながら、あれこれ説明しなくても視覚的に納得できる記号へと洗練させていこう、ということです。現在では日本折紙協会が使用する記号や、技法や基本形の名称は、一種のスタンダードとなっています。作品それぞれが持つ独自の構造は、折り図によって記録されるのです。

（１）と（２）、（３）と（４）はそれぞれ対になっていて、互いに切磋琢磨、刺激し高め合う関係と言えるのが興味深いところです。

（５）会員（読者）の誌上交流：

投稿創作作品の発表に限らず、お便りや、作品展などを報告するのも、会報の大切な役割です。遠方だから見に行けないなどということもなく、誌上作品展なら、自分の折り紙活動を世界中の読者に見てもらえます。もちろん会報ですから事務局からも発信します。百貨店での催事「世界の折り紙展」や、実際に人と人とが交流する親睦および勉強会「折紙シンポジウム」など、協会主催イベントも積極的に行い、愛好家の交流の一助となっています。

NOA　BOOKS（ノアッブックスシリーズ）は月刊おりがみから生まれた単行本です。『鶴のおりがみ』（ISBN978-4-86540-010-6　本体価格1,800円）

最新刊『おりがみでハロウィン』（ISBN978-4-86540-060-1　本体価格1,600円）

◆広く深い折り紙の海

「折り紙」という言葉は「用紙」「折る行為」「完成形」といったように、複数の意味を持っています。

創作作品は枯渇するのではないか、という初期の予想は杞憂だったようで、投稿作品は途切れることがありません。もちろん「何でもいい」わけではありませんが、掲載するものがない、というような状況に陥ったことはありません。また、折り紙に適した和紙の誕生と日本の折り畳み文化が融合していく歴史、美術工芸といった造形教育の側面だけでなく、正方形という特殊な用紙形に隠された幾何学、近年は開閉構造の工学的な応用も試みられているように、「折り紙」の世界はこれほど広く深いのです。

武家の礼法がルーツとされ、幼児教育に導入された経緯のある折り紙ですから、どこかしら（「躾」のような）かしこまった雰囲気があるのはある程度仕方のないことですが、一般的なイメージである「子女のたしなみ」「子どもの遊び」などと決めつけて自分とは関係のない世界だ、と思ってしまうのは実にもったいない。年齢性別国籍問わず、誰でも、自分のレベルや興味に合った楽しみ方ができるのが折り紙なのです。

『月刊おりがみ』が、初めて読む人には折り紙をあらためて見直すきっかけに、既にご愛読いただいている皆さんにはこれからもずっと驚きと発見を提供して行ければ、制作者として嬉しい限りです。

（あおきのぶお／日本折紙協会編集長）

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率８%）表示です。

『蚕糸王国　長野県　－日本の近代化を支えた養蚕・蚕種・製糸』●新津新生著

富国強兵の時代、わが国の資本主義を支えたのは生糸である。「生糸を売って軍艦を買った」と言われるほどに多額の貿易黒字をもたらし、生産量は他国を圧していた。生糸は繭から糸をとる製糸と、その前段階として、蚕種（蚕の孵化）から、蚕を育てる桑の栽培、繭を作るまでの養蚕からなり、前者は工業、後者は農業の分野に属している。

長野県では最盛期には80％以上の農家が養蚕に携わっており、まさに世界の蚕糸王国であった。王国はどのようにして生まれたのか。自然条件、技術開発、労働力、製糸組合制度、資金と地方金融、企業経営者の人物像と社会貢献、また、そこから派生した社会運動や近代教育の普及まで、県内各地域、各結社・組の実態を、様々な観点から明らかにする。蚕糸王国は1930年代の世界恐慌によって衰退し、満蒙開拓のお先棒を担いで軍国主義にのめり込んでいく。その教訓は現代社会が汲むところが少なくないとの指摘には考えさせられる。

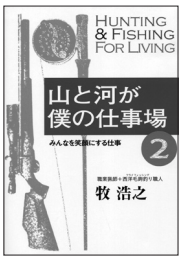
◆ 1728円・Ａ５判・263頁・**川辺書林**・長野・2017/2刊・ISBN9784906529865

『「勝ち組」異聞　－ブラジル日系社会の戦後７０年』●深沢正雪著

太平洋戦争の終結後、ブラジルの日本人移民の間では、日本の敗戦を受け入れない「勝ち組」と受け入れた「負け組」のふたつのグループが生まれました。そして1946年に「勝ち組」の過激派による「負け組」の中心人物殺害事件を機に、多くの犠牲者を出す凄惨な抗争が始まります。従来は、現状を認めない「勝ち組」のテロ事件として語られてきた一連の事件を再考したのが本書です。殺人は「勝ち組」の中でもほんの一部の人々によって行われたこと、「負け組」も警察と組んで半ばリンチのような報復に走ったことなどが指摘されています。ブラジルへの同化と記憶の中で純化される故郷日本の間で揺れ動く、移民やその2世3世の心情を推し量り、当時を知る人の貴重な証言も得て、何故このような事件が発生し、正しい内実が伝えられなかったのかが明らかにされます。特に戦中から強まったブラジル政府による日本人への弾圧政策が移民社会にもたらした亀裂には暗然とさせられます。

◆1944円・四六判・276頁・**無明舎出版**・秋田・2017/3刊・ISBN9784895446242

『山と河が僕の仕事場２　－みんなを笑顔にする仕事』●牧　浩之著



初めて手掛けたハクサイが立派に育って収穫を迎えた。その青々としたハクサイを掲げて見開きのカラーページで満面の笑みを浮かべる男性。彼こそが川崎出身でありながら妻の故郷宮崎県高原町の釣り場に魅了され、結婚と同時にＩターン移住した著者である。本書は2015年に同タイトルで猟師と西洋毛鉤釣り（フライフィッシング）職人ができるまでを綴った本の続編で、その後の目まぐるしくも充実した挑戦の日々が記されている。　カモやキジはもちろん、シカやイノシシも撃つ。奇跡の大イノシシが捕れた時は闘病中だった妻の父にも肉をふるまう。庭や畑を引き継ぎ、野菜やキノコ作りにも挑戦。地元猟友会の有害鳥獣対策班に入り、全国的にも数少ない網猟狩猟免許も取得。次から次へと広がる地元の人とのつながりを財産に、山と河に導かれ、自分の仕事で笑顔になってくれる人がいる人生を楽しむ著者。数多くの写真で輝く笑顔や風景や動物たちがそんな生活を余すところなく表現している。

◆ 1728円・Ａ５判・189頁・**フライの雑誌社**・東京・2017/2刊・ISBN9784939003691

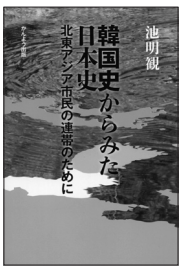
『橡ノ木の話〈復刻〉』●富木友治著

昭和17年、秋田魁新報に52回に渡って連載された小説の復刻版である。昨年は著者生誕百年にあたり、秋田県仙北市の新潮社記念文学館で企画展が開催された。挿画は郷土の自然や風俗を愛した版画家・勝平得之が担い、著者の小説世界の生活風土をあるがままに表現したかのような朴訥な作品が随所に挿入されている。本書は東北地方の民話をモチーフにした３話から構成されているが、旅人が豊かな自然に彩られた黄昏の山道をひたすら歩いていく序章を見逃すわけにはいかない。その序章の最後で旅人は、古い橡ノ木の根を枕にして深い眠りに落ちていく。読者が後に続く三つの物語を読み進めていくと、それぞれ独立した物語であるはずの３話の印象的な場面で橡ノ木が登場することに気づくはずである。

永遠とも思われる長い時間の中で人々の営みを見続けて来た古木が、序章の旅人に夢の中で語り聞かせた物語が本書なのだ、という妙に読者は気づくだろう。

◆ 3024円・Ａ５判・165頁・**無明舎出版**・秋田・2017/3刊・ISBN9784895446266

『韓国史からみた日本史　－北東アジア市民の連帯のために』●池　明観著



著者は韓国民主化運動に半生を捧げたことで知られる知識人である。現在もなお、朝鮮半島において理想的な民主主義の姿がどうあるべきかを発信し続けている。ＥＵの存続が昨今危ぶまれているが、かつてヨーロッパが国家を超えた地域的なつながりにより平和や経済発展を目指したように、韓国・日本・中国の三国もそれに倣って、北東アジアという一つの共同体を建設すべきではないかと説く。しかも国家間ではなく市民レベルで連帯していくことが重要だと。だが、その前には北朝鮮問題が大きく立ちはだかる。これについて著者は言葉少なめである。これを解決しなければ、著者の思い描く理想的未来像の実現は難しいだろう。

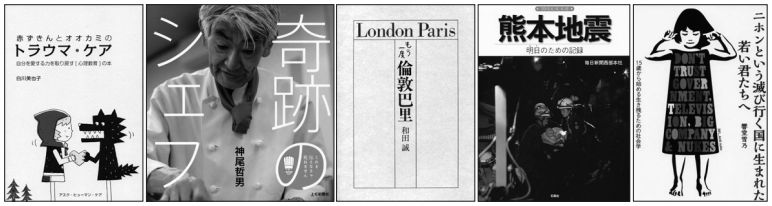
それはそうと、本書の醍醐味はなんといっても前半の書き下ろしの部分にある。日本は古代から近代に至るまで「武士社会」だった。日中の狭間で絶えず苦闘した朝鮮は「文官社会」を志向せざるを得なかった。等、北東アジアから歴史を再構成する。

◆ 1620円・四六判・137頁・**かんよう出版**・大阪・2017/4刊・ISBN9784906902798

売行良好書　期間：2017年3月15日～4月14日

［出荷センター扱い］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『赤ずきんとオオカミのトラウマ・ケア』1944円・アスクヒューマンケア　(2)『奇跡のシェフ』1512円・上毛新聞社　(3)『もう一度　倫敦巴里』2376円・ナナロク社　(4)『熊本地震』1944円・石風社　(5)『ニホンという滅び行く国に生まれた若い君たちへ』1620円・白馬社　(6)『シャクシャインの戦い』2700円・寿郎社　(7)『ブックトークのきほん』648円・東京子ども図書館　(8)『境線写真集』2160円・今井出版　(9)『光の街、リスボンを歩く』1620円・書肆侃侃房　(10)『忘れられた人類学者（ジャパノロジスト）』2160円・忘羊社　(11)『熊本地震２０１６の記憶』1944円・弦書房　(12)『牧野富太郎　通信』810円・トンボ出版　(13)『闇を照らす』1728円・長崎新聞社



［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『たべるのがおそい ｖｏｌ．３』1404円・書肆侃侃房　(2)『本の雑誌４０７号』720円・本の雑誌社　(3)『本の雑誌おじさん三人組が行く！』1944円・本の雑誌社　(4)『東京かわら版　４月号』650円・東京かわら版　(5)『本屋大賞　２０１７』600円・本の雑誌社　(6)『奇跡のシェフ』1512円・上毛新聞社　(7)『近世城郭の考古学入門』3240円・高志書院　(8)『ニホンという滅び行く国に生まれた若い君たちへ』1620円・白馬社　(9)『もう一度倫敦巴里』2376円・ナナロク社　(10)『織豊系城郭とは何か』5400円・サンライズ出版

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『ニホンという滅び行く国に生まれた若い君たちへ』1620円・白馬社　(2)『奇跡のシェフ』1512円・上毛新聞社　(3)『シャクシャインの戦い』2700円・寿郎社　(4)『石田三成の青春』1836円・サンライズ出版　(5)『内地の歩き方』1620円・ボーダーインク　(6)『高尾山・景信山　陣馬山　登山詳細図』823円・吉備人出版　(7)『茨城　歴史人物小事典』1296円・茨城新聞社　(8)『光の街、リスボンを歩く』1620円・書肆侃侃房　(9)『境線写真集』2160円・今井出版　(10)『ふくしまの低山５０　改訂新版』1620円・歴史春秋社

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

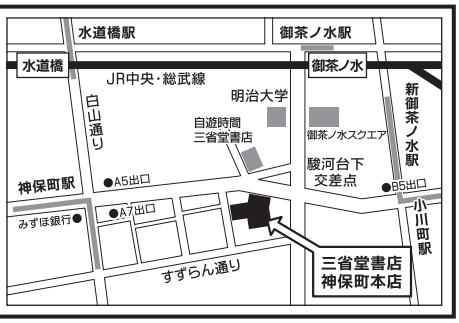
▼2017年5月1日（月）～5月31日（水）にかけてジュンク堂書店三宮駅前店にて『**全国新聞社ふるさとブックフェア**』開催予定です。フェア期間中、神戸では神戸開港150年記念イベントが多彩に行われるほか、全国の広告関係者、マスコミらが集う全日本広告連盟神戸大会が開催されるとのことで、多くの人出が見込まれようです。

▼一昨年「第40回木村伊兵衛写真賞」を受賞した石川竜一氏が展覧会ディレクターを務める「**写真家が見つめた沖縄 1972-2017」展**が、2017年4月25日(火)～5月21日(日)までの間、沖縄県立博物館・美術館 コレクションギャラリー1・県民ギャラリーにて開催予定です。「写真家たちは45年間の沖縄の姿をどう捉えたのか…沖縄では1972年の本土復帰以降、世界的にも評価の高い写真家たちが独自の視点で沖縄の姿を撮影しており、現在も多数の写真家が活躍しています。本展では彼らの写真約150点により、本土復帰から今に至る沖縄の姿を大規模に展観します。」（展覧会HPより）

郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。基本的にメール便は、一冊２１０円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから３～４日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合せ下さいませ。
◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせて頂きます。

★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

三省堂書店 BOOKS SANSEIDO
営業のごあんない
神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間 10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。